

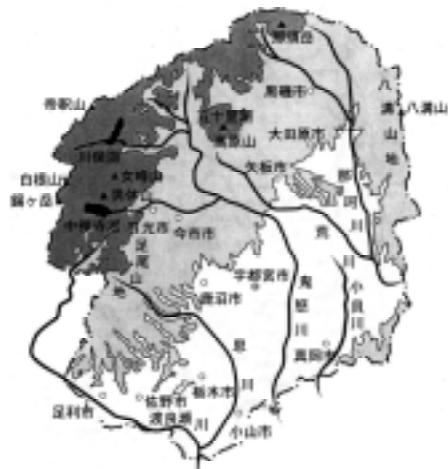
# 第1部 総 説

## 第1章 県勢の概況

### 1 地 勢

本県は、関東地方北部に位置する内陸県で、首都東京からは60～160kmの範囲にある。面積は6,408.28km<sup>2</sup>（全国20位）で、東西約84km、南北約98kmとほぼ橿円形である。全国面積の約1.7%を占め、関東の都県中、最も広大な県である。現在、49市町村（12市35町2村）で構成されている。

県土は、地形上大きく三つの地域に分けることができる。その一つは、北西部山岳地帯で、白根山をはじめ、男体山、女峰山などがそびえ、太平洋側と日本海側の分水嶺を形成している。もう一つは、なだらかな丘陵である八溝山地帯で、県東部、茨城県境に沿って南北に伸びている。さらに、これらの両山地にはさまれ、南に開いた平地が中央平野部で、北から白河丘陵、那須野が原扇状地、塩那丘陵地が連なり、南の平野部へと続いている。



県内を流れる河川は、概ねその源を北西部山岳地帯に発し、鬼怒川（124.8km）、渡良瀬川（55.8km）は、南流して利根川に合流し、那珂川（118.5km）は東折して茨城県の那珂湊から太平洋に注いでいる。

代表的な湖沼としては、日光の中禅寺湖（11.49km<sup>2</sup>）や湯の湖（0.35km<sup>2</sup>）等があり、貴重な水源となっている。

### 2 人 口

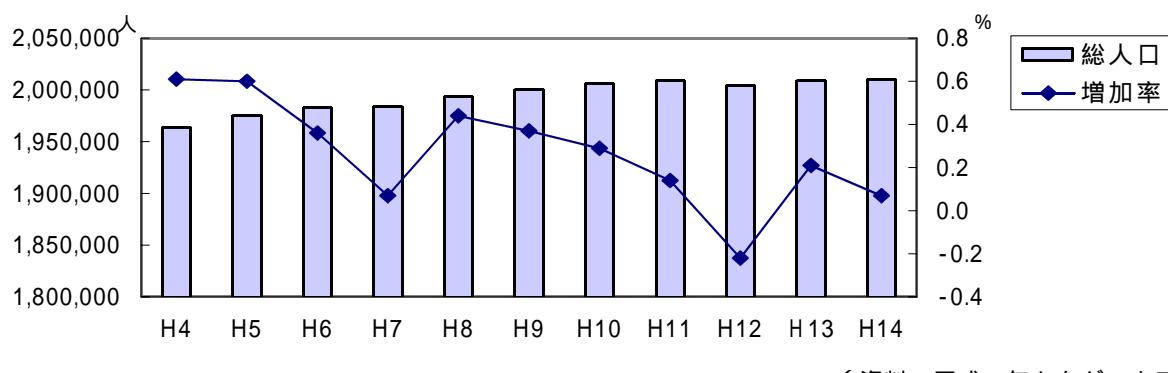
本県の人口は14年10月1日現在で201万507人（男99万8,248人、女101万2,259人）で、昨年同月に比べ1,443人（男449人、女994人）増加し、前年に比べ0.07%の増となっている。

人口の推移を見ると、昭和40年代半ばから50年代の前半にかけて、増加率が年平均1%を超える高い伸びを示してきた。近年、出生数の減少などにより、増加率は鈍化傾向にある。2年から7年までの5年間で4万9,222人（年平均増加率0.50%）、7年から12年までの5年間で2万427人（同0.20%）の増加となっている。

自然動態は、昭和40年代後半の第二次ベビーブーム期をピークに、その後は出生率の低下などにより漸減の傾向にある。14年は出生数が19,028人、死亡数が15,981人で、3,047人の増加であった。

一方、社会動態は、昭和44年以降転入超過の状態が続いていたが、7年、11年及び12年は、転出超過となった。13年に再び転入超過となつたが、14年は1,604人の転出超過となつた。

#### 【総人口の推移と増加率】



（資料：平成14年とちぎの人口）

### 3 経 濟

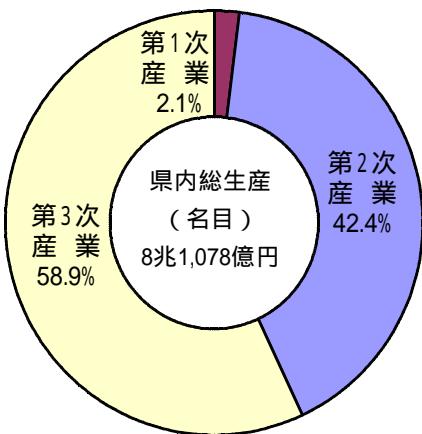
#### (1) 経 濟

県内経済は、順調な成長を続けてきたが、バブル経済の崩壊により4年度にマイナス成長となつた。5年度、7年度及び8年度はプラス成長であったが、9年度以降はマイナス成長となつた。

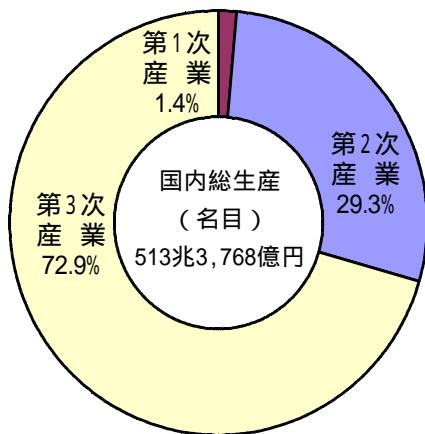
12年度の県内総生産額（名目値）は、8兆1,078億円（対前年度比1.6%）となり、プラス成長となつた。

本県の産業構造を県内総生産の構成比から見ると、全国と比較して第2次産業、特に製造業の割合が極めて高いことが特徴となつてゐる。

【県内総生産の構成比(12年度)】



【国内総生産の構成比(12年)】



（注）控除項目等を含むため、構成比の合計は100%にならない。

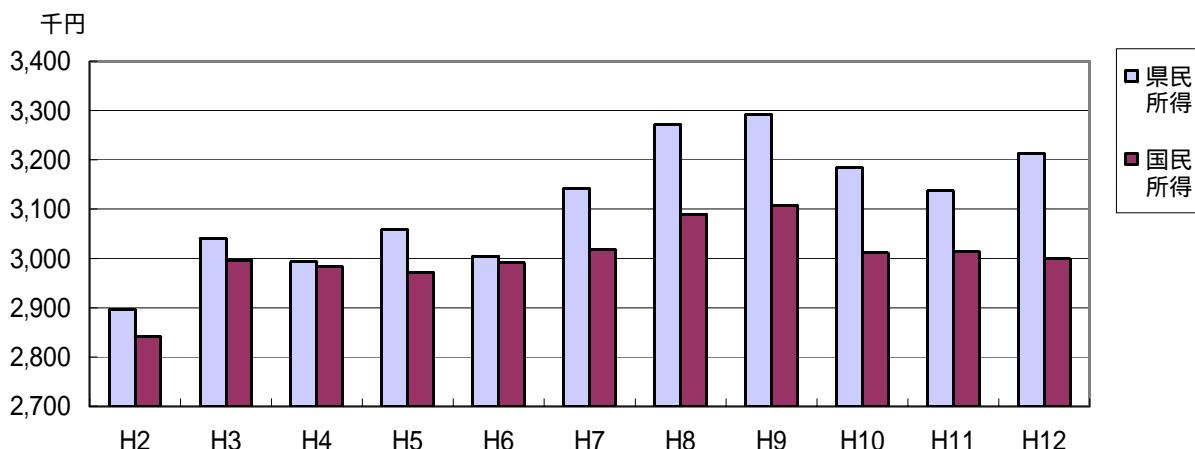
（資料：平成12年度とちぎの県民経済計算、平成15年国民経済計算年報）

#### (2) 県民所得

12年度における本県の県民所得は、6兆4,423億円で、前年度に比べ2.1%増加した。

また、一人当たりの県民所得は321万3千円で、前年度に比べ2.4%増加した。一人当たりの国民所得（299万9千円）に対する割合は107.2%となり、国の水準を上回っている。

【一人当たり県民所得と国民所得の推移】



## 4 土地利用

県土の利用状況は、13年10月現在、北西部や東部の山地を中心に森林が35万2,800ha（県土の55.1%）、中央部から南部を中心として農用地が13万2,400ha（20.7%）、鉄道や主要国道沿いに住宅地、工業用地等の宅地が4万6,600ha（7.3%）となっている。

土地利用の推移を見ると、本県が首都圏に位置し、交通網の整備（新幹線、高速道路等）が図られていることにより、農用地、林地から宅地等への転換が見られ、都市化が進展してきている。

### 【土地利用の推移】

地 目	60年		7年		11年		12年		13年	
	面積 (ha)	構成比 (%)								
農用地	144,400	22.5	142,200	22.2	133,700	20.9	133,000	20.8	132,400	20.7
森林	363,000	56.6	360,200	56.2	351,700	54.9	352,900	55.1	352,800	55.1
水面・河川・水路	28,900	4.5	29,400	4.6	30,000	4.7	30,000	4.7	30,000	4.7
道路	22,300	3.5	23,900	3.7	27,300	4.2	27,500	4.2	27,800	4.3
宅地	37,100	5.8	39,900	6.2	45,900	7.2	46,300	7.2	46,600	7.3
住宅地	24,000	3.7	25,500	4.0	28,800	4.5	29,100	4.5	29,300	4.6
工業用地	4,300	0.7	4,800	0.7	5,000	0.8	5,000	0.8	4,800	0.7
その他の住宅	8,800	1.4	9,600	1.5	12,100	1.9	12,200	1.9	12,500	2.0
その他	45,700	7.1	45,200	7.1	52,200	8.1	51,100	8.0	51,200	8.0
合 計	641,400	100.0	640,800	100.0	640,800	100.0	640,800	100.0	640,800	100.0

（注）端数処理をしたため、計が一致しない場合がある

（資料：県企画部土地利用対策課調べ）

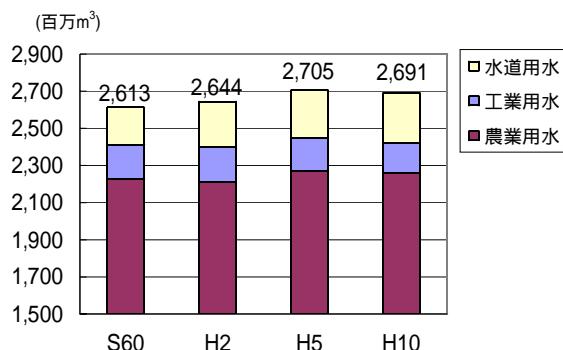
## 5 水需要

本県の水需要は、年々増加しており、昭和60年には年間総需要量26億1,300万m<sup>3</sup>であったものが、10年には26億9,100万m<sup>3</sup>となっている。

その伸びは、近年、緩やかになってきており、用水によって状況に違いがあるものの、全体としては横ばい傾向で推移していくものと考えられる。

10年の用途別水需要は、農業用水が22億6,100万m<sup>3</sup>で全体の84.0%、工業用水が1億6,200万m<sup>3</sup>で6.0%、水道用水が2億6,800万m<sup>3</sup>で10.0%となっている。

### 【水需要の推移】



（資料：県企画部水資源対策室調べ）

## 6 気候の概況

14年の県内の天候は、気温が年初めから夏ごろにかけて高く、特に、3~4月は極端に高温であった。また、7月には、県内に台風第6号と第7号の影響があり、特に台風第6号による大雨で、農作物などに大きな被害が生じた。8月は雷の発生が多く、宇都宮の雷日数は平年の約2倍となる11日であった。年末は強い寒気の影響で、気温が低く、大雪となった。

年平均気温は、県内の観測地点で平年より0.5 前後高く、宇都宮では、明治24年（1891年）の観測開始以来4番目に高い14.3（平年13.4）となった。

年間降水量は、県南東部を中心に平年を下回ったところがあったが、その他の地点では、平年より多かった。宇都宮の年間降水量は、1,571.5mm（平年1,443.4mm）であった。

年間日照時間は、各地ともほぼ平年並みであった。（宇都宮：1,997.4時間）

なお、関東甲信地方の梅雨入りは6月11日ごろ（平年6月8日ごろ）、梅雨明けは7月20日ごろ（同7月20日ごろ）であった。

（資料：宇都宮地方気象台）